



溝口 敦の
Atsushi Mizoguchi

さらばリーマン

第128回

「人生百年」を実践して中で 定年後年に起業に挑む 荒れ林に建機会社の元幹部

佐野孝志さん

Takashi Sano

グリーンネット・エンジニアリング代表取締役（76歳）



PROFILE

東京大学農学部卒業

キャタピラーミツubishiに入社

関連販売会社の社長

本社の常務取締役

竹粉製造機の会社を設立

佐 野孝志さんは今76歳だが、気宇壯大な仕事を進めている。日本の山野で荒れ狂う竹林を有効活用するため、竹粉製造機を開発・製造し、電子顕微鏡下で竹粉を観察・分析した上、土壤改良、飼料、食品、化粧品、バイオマスプラスチックなどに活用するため、何回も実用化試験を繰り返し、すでに一部は製品化している。およそ竹に関するかぎり、原料の入手、加工から製品化・販売に至るまで、全分野の研究開発を同時並行的に進めて

いるのだ。
勤めを辞めたのが62歳のとき。直ちにかねてから目をつけていた竹に取り組んだ。佐野さんの考えでは、起業から20年後の82歳まで現役として竹の事業化に取り組み、そのときまでに仕事に目鼻をつける。82歳で次世代に経営を譲つて引退。さらに20年後の102歳まで生きて、悠々と老後の生活を楽しむという構想を持つ。

驚くべき計画だが、考えれば現在、身体が頑健な人は平気で寿命100歳を超える。102歳は絵空事ではなく、現実性が高い。しかし、自分の寿命だけは誰にも分からぬ。ガンや心臓病という伏兵がいつ飛び出していくか知れたものではない。高齢者の多くは薄氷を踏む思いで毎日を過ごしているはずだが、佐野さんは自分の寿命を将来設計に組み込んで泰然としている。不敵すぎる胆力といふべきだろう。

佐野さんは1942年、東京・東陽町の生まれで、8人きょうだいの下から2番目。一家は戦災で焼け出され、中市で過ごした後、父親の郷里である大分県の国東半島に移り住んだ。佐野さんが小学3年の夏、東京に舞い戻り、中野区鷺宮に居を定めた。

都立武蔵丘高校を経て、東京大学農学部農業工業科に進んだ。66年に大学を卒業し、キャタピラーミツubishiに入社、当時は技術畠に配属された。以後、順調に出世し、2000年には関連会社である西関東販社の社長に就任した。売り上げ低迷の販社の経営を立て直すよう求められたのだ。

「それまで西関東には本当の営業がなかつたんです。得意先を一度も訪ねたことがない管理者さえいた。私の挨拶回りに担当者が同行するのはいいけど、私と一緒に先方の社長さんや担当部長に名刺を切つてはいる。初めて顔を合わせたんでしょう。ひどいものです。私が立てた目標は、得意先が必要とするものは、なんでも揃えてお届けすること。それがキャタピラーミツubishiで扱っている商品か、そうでないかなど関係ない。とにかく顧客のお役に立つ。社員にやる気が出れば、決して難しい仕事じゃない。もちろん社員の尻を叩くだけでなく、成績のいい人は褒め、

1週間ほど母親の郷里である群馬県安中市で過ごした後、父親の郷里である大分県の国東半島に移り住んだ。佐野さんが小学3年の夏、東京に舞い戻り、中野区鷺宮に居を定めた。

優秀者は表彰する。これで営業の目的が変わつてきて、黒字に転換、全国の販社中トップの成績を上げるまでに立ち直りました」（佐野さん）

会社はブルドーザーのトップメーカー

一だったが、1987年に新社名（新キャタピラー三菱）になつたあたりからバックホー（油圧ショベル）が主力商品になつた。一貫して土木・建設関係が得意先であり、その関係から「竹がはびこつて杉やヒノキ林まで侵食する。何とかならないか」という相談も舞い込んだ。

当時、竹粉が土壤改良によく、田畠に撒けば収穫量が増すことが知られた。佐野さんは製造機を販社で扱い、いたし、竹粉製造機さえ販売された。竹粉は收穫量が増すことが知られた。佐野さんは製造機を販社で扱い、30台ほど売つたが、すぐその製造機には改良の余地があると気づいた。何しろ大学の農業工業科では半分以上の講義を工学部で受けたのだ。機械にはともと強く、日ごろから親しんでいる。竹の幹には無数の維管束がある。維管束中に乳酸菌が何億と生息している。竹をただ破碎すると、維管束が壊れ、せつかくの乳酸菌を殺して土壤改良の効果も落ちる。乳酸菌を生かすためには竹を数ミクロンの厚さで垂直に

断ち切り、維管束の多孔質を残さなければならぬ。そこを改良するよう竹粉製造機メーカーの社長に伝えたが、社長は改良しようとはしなかつた。

佐野さんは2003年、上席執行役員として本社に復職し、04年、常務取締役に就任した。06年6月に常務を退任、7月には東大大学院農学生命科学研究科の受託研究員の資格を得た。竹粉にしつかり取り組むためには電子顕微鏡や各種の分析機器など、科学技術を活用しなければならない。研究員の資格はそれを可能にし、しかも東大工学部や農学部の教授などに教えを乞いやすくした。

竹林が他の樹林帯や里山を侵食、壊滅状態にまで追い込んでいる。

竹の猛威を阻止するには「竹は儲かる」が常識となるほど竹の経済価値を高める必要がある。そのための技術の前提がまず高速竹粉製造機なのだ。

竹粉の農業分野への利用としては次のような試験結果を得た。水稻栽培（玄米で40%の収量増加）、ホウレンソウ

■ 製造機を作り活用方法を考案 ■ 害草に秘められた可能性

こうして佐野さんはまず高速竹粉製造機から作りはじめた。長さ4メートル、直径6～18センチの竹（主に孟宗竹）に対し、機械に超硬性カッターチップ（市販品を利用）28枚を取り付けることで粒度300ミクロンの竹粉を1日0・8～1トン製造できる。

全国の竹林は統計上16万ヘクタールとされるが、実際には侵食でその3倍にも拡大している。竹は地表下50～60

センチにびっしり根を張り、豪雨時にはそれ以下に雨水を浸透させない。そのため地滑りや土砂崩れの原因にもなり得る。竹は「害草」なのだ（小杉山基昭著「竹を食う」の表現）。

竹林は竹材としての活用やタケノコの食用によって手入れされてきたが、近年、竹材はプラスチックに、タケノコは中国産に押されて放置され、今や竹林が他の樹林帯や里山を侵食、壊滅状態にまで追い込んでいる。

竹の猛威を阻止するには「竹は儲かる」が常識となるほど竹の経済価値を高める必要がある。そのための技術の前提がまず高速竹粉製造機なのだ。

竹粉の農業分野への利用としては次のような試験結果を得た。水稻栽培（玄米で40%の収量増加）、ホウレンソウの実証試験で堆肥と竹粉を併用することで収量、糖度とも最高値を記録した。またサツマイモと白菜の試験では化学肥料と竹粉の組み合わせで収量がそれぞれ1・2倍、1・4倍になつた。農

林水産省の補助事業として南あわじ市の有機栽培農家でレタスの栽培にも取り組み、収量13%増加、保存期間2週間への延長などの成績を示した。

畜産分野では黒毛和牛の子牛への竹

粉給餌で好結果を得たし、二次破碎するごとに50ミクロン以下に微細化し、食品や化粧品、サプリメントに応用している。

中でも注目すべきはプラスチックへの竹粉添加だろう。竹粉を50～70%の高濃度で溶融させることができると判明、その結果、プレス成形どころか射出成形が可能になり、曲げ弾性率が4倍に、荷重たわみ温度が1・5倍になるなど、目からウロコの結果を得た。

竹粉をプラスチックに混入できるなら、原料のナフサを節約できるほか、PLA（ポリ乳酸、植物由来プラスチック）に添加すれば、生分解性プラスチックの製造が可能になる。しかも原材料として竹粉の使用量が大きいから、竹粉利用の最大手にもなり得る。

竹には製紙原料やシナチクへの加工など、他の利用策も検討されているようだが、なぜか佐野さんの竹粉利用が王道という気がする。川上から川下まで網羅し、活用分野の幅が広い。佐野さんが現役バリバリの後期高齢者であることは間違ひなさそうだ。

W

みそぐち・あつし ノンフィクション作家、ジャーナリスト。1942年東京都生まれ。暴力団や新宗教に焦点をあてて執筆活動を続け、「食肉の帝王」で第25回講談社ノンフィクション賞等を受賞。